

# スピノザ Spinoza, Baruch de 1632 ~ 1677

オランダのアムステルダム生まれの哲学者。輸出入業を営んでいた父ミカエルはポルトガルから亡命して来たユダヤ人の子孫であり、有力者の一人であった。西欧思想に興味を寄せたスピノザは、スコラ哲学、ストア哲学と遍歴するうちに、自由思想家ファン・デン・エンデンの強い影響を受け、数学やデカルト思想などに傾倒した。

彼は、人間の本質は思惟にあり、人間にとって自己の思惟を完成することが真に自己を維持する道であると考えた。また、「神に酔える哲学者」と評された彼は、全てのものの原因となるようなもの(究極原因)を神と名づけ、「神すなわち自然」であるとする汎神論的一元論を唱えた。

彼の思想と言動は、後に無神論者としてユダヤ教から破門され故郷を追われる一因となった。晩年は、習い覚えたレンズ磨きでささやかな生計を立て、思索の日々を送ったが、44歳の若さで世を去った。

## Great Books 25 エティカ(倫理学) (Ethica ordine geometrico demonstrata)

『エティカ』はスピノザの全思索を傾けた主著であり、十数年をかけて1675年に完成したが、生前は出版には至らなかった。死後、スピノザの遺言で無著者名で出版されたが、これはスピノザが自著を誰もが自明とする真理の体系であるとし、そうした書物には著者名は不必要だと考えたからである。

本書の内容は、形而上学・心理学・認識論・感情論・倫理学を含んだ思想を体系化し、「幾何学的方法」によって論理的な「証明」を行ったもので、当時の哲学書としては独自のものであった。

本書の中で、スピノザは、人間の精神的な活動は「認識」であるとしている。彼は、その「認識」を感性的認識(感覚や欲望に基づく)・理性的認識(概念や推理に基づく)・直観的認識(物の本質をとらえ神との合一にいたる)の三つであると考えた。そして人間は、三番目の直観的認識によって、万物を「**永遠の相のもとに**」みることで、神との合一を自覚することが大切であるとしたが、それを実践することは極めて困難であるとも述べている。

『エティカ』は、いっさいの感情や想像力を拒否した禁欲的で厳密な思惟の所産である。ここで用いられた方法(幾何学的方法)は極めて数学的であり、古代から厳密な学問的方法の模範とされたエウクレイデスの「数学原論」の方法を、哲学に利用したものであった。哲学の革新を志した17世紀の哲学者、とくに合理主義・理性主義者たちはこぞってこの方法を導入したが、これを徹底し完全なものにしたのが、スピノザなのである。

## Key Word 神への知的愛

**定理 27** この第3種の認識から、存在しうる精神の最高の満足が生じてくる。

**証明** 精神の最高の徳は、神を認識することである、あるいはものを第3種の認識によって認識することである。そしてこの徳は、精神がこの認識によってものを認識することが多ければ多いほど、それだけ大きくなる。かくてものをこの種の認識する人は、人間の最高の完全性に到達する。したがって最高の喜びを感じる。しかもそれは、みずからの観念とその徳の観念をともなった喜びである。したがって、この種の認識から存在しうる最高の満足が生ずる。かくてこの定理は証明された。

**定理 30** われわれの精神は、自分自身や身体を**永遠の相のもと**で認識するかぎり、神を必然的に認識し、また自分が神のうちにあり、神によって考えられることを知る。

**証明** 永遠とは、必然的な存在をふくむかぎりの神の本質そのものである。それゆえ、ものを永遠の相のもとで考えることは、ものを神の本質によって実在的な存在として考えるかぎりにおいてか、それとも神の本質によってみずからのうちに存在をふくむかぎりのものを考えることである。したがって、われわれの精神は、自分自身と身体を永遠の相のもとで考えるかぎり、神を必然的に認識し云々。かくてこの定理は証明された。

**定理 33** 第3種の認識から生ずる**神への知的愛**は、永遠である。

**証明** なぜなら第3種の認識は、永遠である。したがってそれから生ずる愛もまた必然的に永遠である。かくてこの定理は証明された。

注解 この神への愛にははじまりがないけれども、それは前定理の系の中で仮定したように、さながらいま生まれてきたかのように愛のあらゆる完全性をそなえている。だが、ここにただ一つ相違がある。それはいまわれわれが精神に帰せられていると仮定した完全性を、精神が永遠にそなえており、しかも永遠の原因としての神の観念をともなっているということである。もし喜びがより大きな完全性への移行にあるとすれば、至福とはじつに精神が完全性そのものを所有することでなければならない。

< 工藤喜作, 齊藤博(訳) 『世界の名著 25 スピノザ・ライプニッツ』 中央公論社 >

## ◆ *Great Books* 文献案内

- 📖 エチカ 上(岩波文庫) 改訳/畠中尚志(訳)  
岩波書店 1975年刊 295p <I135/スA/1> 資料番号 12251153
- 📖 エチカ 下(岩波文庫) 改訳/畠中尚志(訳)  
岩波書店 1975年刊 151, 29p <I135/スA/2> 資料番号 12251146
- 📖 世界の名著 25 スピノザ・ライプニッツ/下村寅太郎(編)  
中央公論社 1969年刊 530p <080/5/25> 資料番号 12784427

## ◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 スピノザ『エチカ』の研究/福居純(著)  
知泉書館 2002年刊 554, 11p <135.2LL/1> 資料番号 21532288
- 📖 スピノザの政治哲学(政治思想研究叢書)/飯島昇蔵(著)  
早稲田大学出版部 1997年刊 313, 2p <311.1FF/160> 資料番号 20911228
- 📖 スピノザと表現の問題(叢書・ユニベルシタス)/ジル・ドゥル-ズ(著) 工藤喜作(ほか訳)  
法政大学出版局 1991年刊 441p <135.2Z/106> 資料番号 20391694
- 📖 デモクラシ-論の先駆/森尾忠憲(著)  
学文社 1983年刊 240p <311.23P/40> 資料番号 12392734
- 📖 人類の知的遺産 35 スピノザ/工藤喜作(著)  
講談社 1979年刊 393, 5p <280.8K/13/35> 資料番号 10497402
- 📖 スピノザ哲学(文庫クセジュ)/ジョゼフ・モロ-(著) 竹内良知(訳)  
白水社 1973年刊 161p <135.2D/4> 資料番号 10220036
- 📖 知性改善論(岩波文庫)/畠中尚志(訳)  
岩波書店 1968年刊 120p <I135/スA> 資料番号 12251138
- 📖 ヤスパ-ス選集 第23巻 スピノザ/ヤスパ-ス(著) 工藤喜作(訳)  
理想社 1967年刊 289p <134.9/41/23> 資料番号 10217669
- 📖 デカルトの哲学原理(岩波文庫)/畠中尚志(訳)  
岩波書店 1959年刊 297p <I135/ス> 資料番号 12251070
- 📖 神・人間及び人間の幸福に関する短論文(岩波文庫)/畠中尚志(訳)  
岩波書店 1955年刊 266p <I135/ス> 資料番号 12251054
- 📖 神学・政治論 上(岩波文庫)/畠中尚志(訳)  
岩波書店 1944年刊 290p <I135/ス/1> 資料番号 12251088
- 📖 神学・政治論 下(岩波文庫)/畠中尚志(訳)  
岩波書店 1944年刊 307p <I135/ス/2> 資料番号 12251104